台湾高校生日本留学事業
第9期　留学最終報告

当協会の台湾高校生日本留学事業では、台湾の高校生が日本の高校に約11ヶ月間留学し、日本の高校生と同じ環境で生活を送りながら、日本の社会・文化・歴史等を学ぶ機会を提供しています。留学した台湾人高校生が将来知日派人材となり、日台間の架け橋として日台関係の更なる発展に寄与すること、及び受入校の日本人高校生等の台湾に対する理解を増進することを目的としています。2025年度派遣の第９期生は、2025年８月より留学を開始し、2026年７月16日、11ヶ月間の留学を終え帰台しました。今回は、約11ヶ月間の留学を通して学んだこと・成長したことについて、留学生４名の最終報告を紹介いたします。

１枚のレンズから　広がる世界へ

立命館中学・高等学校　謝齊方

私と「日本」という国との出会いは、多くの台湾人とは少し異なるものだと思います。小学生になる前、知り合いが外国語の塾を始めたことをきっかけに、親は私をそこに通わせました。週一回のレッスンでしたが、これは幼い私と日本語との最初の出会いでした。まだ「国」という概念もよく分からなかった幼い私は、日本語を通じてこの国のことを知り始めました。

成長するにつれて、日本への興味は教科書の知識だけではなく、アニメやゲームなどのサブカルチャーにも広がり、日本は私にとって遠くから憧れる存在になりました。アニメや映画を通して、独自の文化を持つ魅力的な国という印象を持つようになりました。そのような印象を持ったまま、私は日本で一年間生活することになりました。そして、その一年は、日本だけではなく、自分自身の物事の捉え方を見直す時間にもなりました。

日本で生活を始めてから、この国への印象は少しずつ変わっていきました。その一つが、交通機関です。

留学前、私は日本の交通機関は時間を厳守するものだという印象を持っていました。しかし、来日して三ヶ月も経っていない頃、部活動の発表に向かうため、バスで集合場所へ行くことがありました。事前に時刻表を確認し、集合時間より十分以上早く到着できるバスを選び、余裕を持って行動していました。ところが、予定時刻を過ぎてもバスはなかなか来ず、時間だけが過ぎていきました。その経験をきっかけに、それまで私が当たり前のように持っていた交通機関への印象を、改めて考えるようになりました。その後、生活を続ける中で、交通機関だけではなく、人々の時間に対する考え方にも目が向くようになりました。

やがて、部活動で現地集合のイベントがありました。その日も電車が遅延していましたが、一人の先輩は集合時間の三分前に到着しました。しかし、部員全員と顧問の先生がすでに十分以上待っていたため、その先輩は先生から注意を受けていました。

最初、この二つの現象がどのようにこの社会の中で共存しているのか、不思議に感じていました。公共交通機関に頼る生活の中で、必ずしも全てが予定通りに進むわけではありません。それでも、人々は約束した時間を大切にし、その考え方は日々の行動や態度に表れていました。そのため､私は「日本＝時間を守る国」ではなく､「時間を大切にしようとする国」なのだと感じるようになりました。そして、その背景には、自分の行動が周囲の人に与える影響を考える姿勢があるのではないかと思いました。

日本への見方が変化しただけではなく、留学生に対する考え方も変わりました。留学前の私は、留学生とは常に積極的で、新しいことに挑戦し、自分の国を代表するような存在であるべきだと思っていました。

そんな中で、ドイツから来た留学生の友人と出会いました。私が思い描いていた留学生像とは少し違っていて、彼女は部活動には参加せず、学校が終わると家へ帰り、自分の時間を大切にしていました。毎朝一緒に登校する

中で、彼女が休みの日を楽しみにしている様子をよく目にしました。当時の私は、彼女の姿を見て、留学という貴重な機会を十分に生かしていないように感じていました。しかし、彼女は自分のペースを大切にしながら、自然体で留学生活を楽しんでいるようでした。その姿を見ているうちに、私は「積極的に多くのことへ挑戦すること」だけが充実した留学生活ではないのかもしれない、と考えるようになりました。

彼女との出会いを通して、私は留学生にも一つの理想の形があるわけではないことに気付きました。人それぞれに大切にしたいことや過ごし方があり、その違いもまた留学の価値の一つなのだと思いました。留学とは、自分の理想を追い続けることではなく、異なる価値観を受け入れ、自分自身の考え方を広げていく経験でもあるのだと感じました。以前、留学生とは「台湾を代表する存在」でなければならないと思っていました。しかし今は、完璧な姿を演じることよりも、一人の台湾人として誠実に人と向き合うことのほうが大切なのではないかと思うようになりました。

この一年間の留学は、私にとって世界を見る「レンズ」を大きく変える経験でした。幼い頃、私は日本語という一枚のレンズを通して、日本という国を知り始めました。そのレンズは、私に新しい世界を見せてくれる大切なものでした。しかし、成長する中で経験を重ねても、そのレンズだけでは見える範囲や捉え方に限界があります。

留学を通して、私は新しいレンズを手に入れました。それは、より広い視野で全体を見ることも、必要な部分に焦点を合わせて深く見ることもできるレンズです。それでも、私が本当に得たものは、ただ性能の高いレンズそのものではありません。自分のレンズには限界があることを知り、必要に応じて調整し、より良いものへと変えていく方法を学んだことです。

これから先、さまざまな人や環境と出会う中でも、一つの視点だけで判断するのではなく、広い視野と細やかな視点の両方を持ちながら、物事の背景を理解しようとする姿勢を大切にしていきたいと思います。



住む人で見る駅

今しかない青春を楽しむ

名古屋市立向陽高等学校　馮于寧

日本へ留学する前、私はせっかくの11か月だからこそ、できるだけ多くのことを学び、旅行をしたり行事に参加したりして、充実した毎日を送りたいと思っていました。しかし、11か月の留学生活を終えた今、訪れた場所や経験したことの数だけでなく、友達と過ごす時間を自分からつくり、今しかない高校生活を一緒に楽しむことも大切だと気づきました。

台湾では、生徒数の少ない学校に通っていました。決まったクラスも、毎日同じ仲間と練習する部活動もなく、生活の中心は勉強や習い事でした。多くのことに取り組み、どれもできるだけ完璧にこなすことが、充実した生活だと思っていました。その生活も十分楽しかったのですが、「高校生活は一度きりだから楽しもう」と考え、ただ友達と楽しく過ごすための時間をつくることはあまりありませんでした。

昨年の夏、日本での留学生活が始まりました。まだ夏休み中で、多くの生徒が部活動で忙しいにもかかわらず、教室には文化祭の準備をする生徒が集まっていました。それが、日本に来て最初に驚いたことでした。文化祭は成績や進学に直接つながるものではありません。それでも、皆で一から何かをつくり、思い出を残すために時間を使う姿から、忙しい中でも高校生活を楽しもうとする気持ちが伝わってきました。

その姿勢は、行事が終わった後にも表れていました。私は日本の高校の「打ち上げ」文化が特に好きです。私の周りでは、定期テストや大会、体育祭、文化祭など、

何かに取り組んだ後には、ほとんど必ず打ち上げをします。結果そのものを祝うというより、皆で食事やカラオケを楽しみながら、それまでの苦労を振り返り、互いの頑張りをねぎらう時間です。また、「終わったら皆で楽しもう」という期待は、努力を続ける支えにもなります。楽しむことまで含めて、努力した日々が大切な経験になるのだと感じました。

特別な行事がない日にも、日常を楽しむ工夫がありました。天気のよい日には、友達の一言で、弁当を持って中庭に行きました。一緒に食べる人や会話はいつもと同じでも、風に吹かれ、銀杏の葉を眺めながら食べるだけで、気分が変わりました。また、雨で体力テストが中止になり、後日やり直すことになった日は、皆が不満に思っていました。しかし、友達の提案でお菓子を持ち寄り、「JKケーキ」を作ったことで、雨に予定を崩された日が特別な思い出に変わりました。小さな提案一つで、普通の日も特別な一日になるのだと気づきました。

私の考えが大きく変わったのは、春休みに陸上部の仲間とナガシマスパーランドへ行った時です。シーズン前で練習は厳しく、３週間で休みは２日しかありませんでした。その一日を遊園地に使うことに、最初は少し抵抗がありました。しかし、新学期が始まれば全員で出かけることは難しいと思い、参加しました。ところが、実際に行ってみると、想像していたよりずっと楽しい一日になりました。アトラクションだけでなく、バスでの移動や行列の待ち時間、食事まで、仲間と過ごす時間は少しも退屈ではなく、心から行ってよかったと思いました。疲れは休めば取れますが、この機会を逃せば、全員で出かけられる日はもう来ないかもしれません。この経験から、楽しみや思い出のために時間を使うことは、決して無駄ではないと分かりました。

それまで私は、友達に誘われることが多く、自分から皆を集めることはほとんどありませんでした。しかし、帰国の一週間前、初めて勇気を出して、陸上部の中長距離メンバーをカラオケに誘いました。すると全員が参加し、普段はほとんど歌わない友達まで来てくれました。私たちは５時間以上歌い、11か月間の厳しい練習や、互いに励まし合った日々を思い出しました。それは中長距離メンバーの打ち上げであり、私の留学生活の締めくくりでもありました。あの時、自分から声をかけなければ、この思い出は生まれませんでした。誘いを待つだけでなく、自分から大切な時間をつくれたことを、心からうれしく思います。

日本での留学は、それまでの生活を否定したのではなく、私にとっての「充実」の意味を広げてくれました。青春は大会や旅行、大きな行事の中だけでなく、中庭で食べた弁当、雨の日につくったケーキ、そして自分から送った「一緒に行かない？」というメッセージの中にもありました。この11か月で、充実した生活とは、何事にも全力で取り組むだけでなく、周りの友達と楽しむ時間をつくり、今しかない青春を大切にすることでもあると学びました。



陸上部の仲間とナガシマスパーランドへ行った時の様子

挑戦する勇気

京都府立山城高等学校　彭漳宸

この一年間で最も成長したことを一つ挙げるとすれば、それは「新しいことに挑戦する勇気」を身につけたことです。共通の母語を持つ人がいない新しい環境では、何をするにも不安がありました。しかし、この留学生活を通して多くの壁を乗り越え、さまざまな新しいことに挑戦したことで、考え方だけでなく、精神的にも大きく成長することができました。

一つ目の例は、人間関係についてです。これは留学生活を支える最も重要な一歩であり、「自分から積極的に話しかけること」でした。会話をする機会があれば、できる限り日本語で自分の気持ちや考えを相手に伝えられるよう努力しました。実は、日本に行く前の私は日本語を話すことがすごく苦手でした。間違えることや笑われることが怖かったからです。しかし、実際に日本人と交流し始めると、その恥ずかしさは自然となくなり、それまで勉強してきた日本語が自然と口から出るようになりました。その時の気持ちは、「留学生だからこそ、積極的に交流しなければもったいない」というものでした。留学生という立場だったからこそ、日本語を話すことへの抵抗感を乗り越えることができたのだと思います。

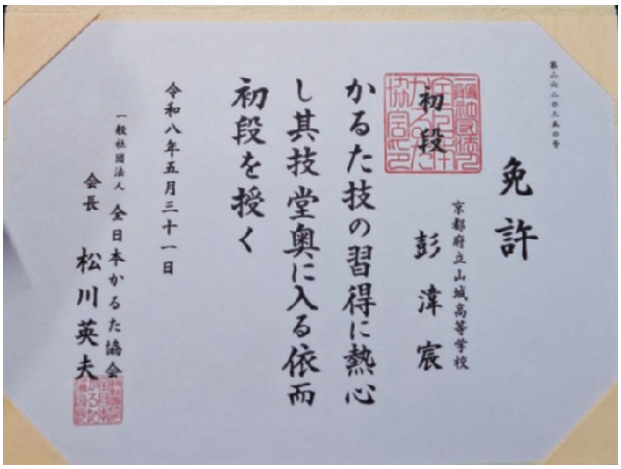
そして、人間関係を広げることにも積極的になりました。台湾にいた頃は、自分から知らない人に話しかけることはほとんどありませんでした。しかし、留学中は、分かっている話題が聞こえてくると、自分から会話に加わり、台湾の文化や生活について紹介することもありました。このような積極的な行動が、人間関係を広げるきっかけになったと思います。

二つ目の例は、部活動です。私にとって弓道部と競技かるた部は、台湾ではほとんど経験する機会のない全く新しい活動でした。最初は、自分が得意なスポーツや経験のある部活動に入りたいと考えていました。その方が知識や技術の差も少なく、安心できると思っていたからですが、野球部やバスケットボール部では留学生の途中入部が難しいなどの事情があり、その結果、弓道部に入ることを決めました。

当時は弓道について何も知らず、部員の動きを見た時には、一つひとつの所作が非常に丁寧で厳しい競技だと感じて、少し気後れしました。また、最初の三か月間は基本動作の練習が中心で、ちょっとつまらないと思ってしまいました。しかし、諦めずに続けたことで、初めて的に当てることができた時には、とても大きな達成感を味わうことができました。

そして、「新しいことに挑戦する勇気」を最も証明できる例が競技かるたです。外国人にとって言語を学ぶだけでも難しいことですが、その言語を使って競技をするのはさらに大変です。同期生のおかげで競技かるたを始めました。しかし、この競技では百人一首すべてを覚えなければならず、初心者にとって非常にハードルの高いものです。もし留学前の私であれば、きっと途中で諦めていたと思いますが、この留学を通して心境が変化し、本気で挑戦してみようと思えるようになりました。試合ができ始めてから、自分より強いライバルに挑戦したくて、たとえA級でも構わないという考え方で、強くなってきました。そして、この半年で毎日続けたからこそ、多くの素晴らしい思い出を作ることができました。

これらの経験を通して、私は「面倒だからやらない」という考え方から、「まずは挑戦してみよう」という考え方へと大きく変わりました。日常生活の小さな出来事においても、一歩踏み出すたびに新しい挑戦がありました。また、留学生に対して接しやすい雰囲気や友達の支えにも、私に挑戦する勇気を与えてくれました。そもそも何よりも、この留学という貴重な経験があったからこそ、私はここまで成長することができたと思います。私は、この留学で得た「挑戦する姿勢」をこれからも大切にして、将来もさまざまなことに積極的に挑戦しながら、自分自身をさらに成長させていきたいと思います。



初段証書

「団結」

静岡県立静岡城北高等学校　林書而

高校１年生の時、将来の夢に少しでも近づきたくなり、日本文化をもっと深く知りたいという思いから、高校生のための日本留学プログラムに参加しました。そして、2025年８月から静岡県の静岡城北高校で、11か月間の留学生活を始めました。

初めは、慣れない環境で生活することに不安を感じていました。でも、11か月間の留学生活を通して、たくさんの貴重な経験をすることができました。その中でも、私にとって特に大きな学びとなったのは、日本語や日本文化だけでなく、「団結」や「協力」の本当の意味を知ることができたことです。

日本の高校生活では、みんなで協力する場面がたくさんあります。普段の授業や体育、学校行事、部活動など、いろいろな活動を通して、生徒同士が支え合うことの大切さを感じました。

その中でも、私が団結の力を強く実感したのは、入学して間もない頃に行われた体育祭です。

９月に静岡城北高校で体育祭があり、クラス全員で参加する競技として長縄跳びがありました。台湾でも長縄跳びをしたことはありましたが、40人以上のクラス全員で一つの目標に向かって取り組むのは、私にとって初めての経験でした。

当時、日本に来てまだ一か月ほどで、クラスメートともまだ十分に仲良くなれていませんでした。そんな状況で、毎朝早く登校して練習したり、体育の授業の空いた時間を使って練習したりすることは、正直、簡単なことではありませんでした。

でも、練習を重ねるうちに、長縄跳びはただ縄を跳ぶ競技ではなく、クラス全員の協力が必要なのだと気付きました。一人一人の跳ぶタイミングや速さ、回す人とのタイミングが合わなければ、うまくいきません。誰か一人の力だけじゃなく、全員が同じ目標に向かって頑張ることが大切なのです。

練習中、クラスメートはお互いに声をかけ合い、失敗した時も責めるのではなく、どうすればもっと良くなるかを一緒に考えてくれました。日本に来たばかりで、まだクラスに馴染めていなかった私にとって、その時間はクラスとの距離を縮めて、本当の意味で仲間の一員になれたと感じさせてくれる、大切な経験でした。

体育祭当日、私たちは何度も練習を重ねた結果、一位を取ることができました。でも、その後さらに記録更新を目指して挑戦した時、私のミスで縄が止まってしまいました。その瞬間、私はとても申し訳ない気持ちになり、みんなの努力を無駄にしてしまったのではないかと感じました。

でも、クラスメートは私を責めませんでした。それどころか、「今までみんなで頑張ってきた時間が大切な思い出になったよ」と励ましてくれました。

その時、私は初めて「団結」の本当の意味を理解しました。以前の私は、チームワークとは一人一人が自分の役割を果たして、目標を達成することだと思っていました。でも、この経験を通して、本当の協力とは単に役割を分担することじゃなく、お互いを信じ、支え合うことだと学びました。誰かが失敗した時こそ、一緒に向き合って前に進むことが大切なのだと気づいたのです。

この体育祭での経験は、その後の留学生活にも大きな影響を与えました。最初は、慣れない環境や日本語への不安から、自分から人と関わるのをためらうこともありました。でも、クラスメートと一緒にいろいろな活動に取り組む中で、少しずつ自分から行動する勇気を持てるようになり、積極的に周りと協力できるようになりました。

11か月間の留学生活を振り返ると、私が学んだことは日本語や日本文化だけじゃありません。人と関わる中で、相手を信じること、助け合うこと、そして集団の中で自分の居場所を作っていくことの大切さを学びました。

台湾に帰国した後も、この経験をこれからの学校生活に生かして、自分から積極的に人と関わり、協力する姿勢を大切にしていきたいです。静岡城北高校で過ごした11か月間は、ただの留学経験ではなく、本当に自分自身を成長させることができた大切な時間でした。



体育祭でクラスメイトとの写真